

## 主流メディアの解決案：「アサドを爆撃して難民を救え」

【訳者注】綿密に論証された、タチの悪いウソを暴く、義憤の論文である。ここで「問題 - 反応 - 解決」(problem-reaction-solution) と言われているのは、イルミナティの常套手段で、デイヴィド・アイク (David Icke) もこのパターンを用いてよく説明している。これは1/28「ニセ旗作戦とは何か？」や、2/28「戦犯キッシンジャーを庇うジョン・マケイン」などを読んでいただければわかる通り、デイヴィド・ロックフェラーやキッシンジャーなど、彼ら自身が正直に手の内を明かしている戦術である。わかり易く言えば、いわゆる「マッチポンプ」のことで、自分で火をつけておいて、自分で消火活動にあたり、恩人面をして何かの目的を果たすことである。

今、ワシントンとその従僕 EU が、御用メディアと手を組んで、自分たちが元凶である大量難民問題を巧妙に逆方向に捻じ曲げ、アサドさえいなければこれはなかった、という論理にすり替えようとしている、と論者は分析している。

昨日 (9/07) のNHK ニュースも、なぜこんなことになったのか、と「なぜ」という言葉を使いながら、それはアサド政権、反政府軍、IS が起こしたことだと説明し、背後のアメリカや西側という言葉は聞かれなかった。こういうものが耳を素通りしてはならない。

By BlackCatte

Global Research, September 6, 2015



ガーディアン紙は現在、よく言われる“問題 - 反応 - 解決”式の、一般的論理操作（マインド・コントロール）の方法のよい例を提供している。

[http://ethics.wikia.com/wiki/Problem\\_Reaction\\_Solution](http://ethics.wikia.com/wiki/Problem_Reaction_Solution)

## ステップ1：問題を見つける、つくり出す、誇張する、あるいはコンテキストを偽る

この場合、ほとんどの主流メディアの第一面から現在、悲鳴が聞こえてくる、「難民危機」がそれである。このヒステリーの合唱は直ちに、ある潜在するアジェンダに、我々の警戒心を呼び覚ますべきである。確かに、何千という難民がいて、彼らの窮状はゾッとするほどだ。確かに、彼らが EU から受けている待遇は、予想された通り、冷酷で人種差別的だ。しかしこれは、帝国主義戦争が始まれば起ることで、ガーディアンでさえ、これは何も新しいことではないと認めている。これまで主流メディアは、2011 以来、祖国を追われたリビア人、2003 年以來、祖国を追われたイラク人、2014 年以來、祖国を追われたシリア人とウクライナ人の窮状を、平気で無視してきた。

<http://www.theguardian.com/world/2015/sep/04/syrian-refugee-crisis-why-has-it-become-so-bad>

そこで我々は問わねばならない——なぜ西側のメディアは、突然、この進行中の人間の悲劇を大きく扱い出したのか？

なぜ、基本的な人間感情——（やってくる国を追われた人々の群れの）恐怖と（彼らの窮状に対する）怒り——を操作することによって、集団的ヒステリーを作りあげるといふ試みが、大々的になされているのか？

これは、メディアとその飼い主たちが、突然、自分の人間性と良心を発見したということだろうか？ まあ、それは常にあり得ることだが、私は、最初にそのように仮定するのは賢明ではないと思う。そして実際、より高い可能性のある答えが、ガーディアン紙がこの時を選んで定義した“危機”への反応に現れている。

The image shows a screenshot of a news website interface. At the top left, it says "refugee crisis Friday 4 September 2015". The main content area features a large video player with a play button and a photo of a man and a woman behind a chain-link fence. The man is holding a sign that says "HELP US". Below the video, there is a headline: "Live Cameron pledges to help 'thousands more' Syrians". Underneath the headline, there is a sub-headline: "Special coverage as David Cameron prepares details of a climbdown on accepting more refugees and the standoff in Hungary continues". At the bottom of the main content area, there are three small text boxes: "David Cameron UK will take thousands more Syrian refugees", "UN EU called on to take 200,000 more refugees", and "The Guardian view Much more must be done, not just by the UK". To the right of the main content area, there are three smaller article thumbnails: "Surge of support Britons rally to help", "Passport, lifejacket, lemons What Syrian refugees pack for the crossing to Europe", and "Solutions? 10 ways to manage the crisis".

## ステップ2：反応

最初に気づくべきことは、メディアの物語では、これら追われてきた人々の窮状が、本当の地政学的コンテキストから、完全にかき離れていることである。転覆する小ボート、身内だけの葬式、集団行進、商店街での野宿、氏名不明の個人のする限りない“個人的物語”の、好色で感情的な、とりとめのない取材のどこを見ても、西側の戦争商売がこの危機全体をつくり出したという事実に、ガーディアンは触れていない。

<http://www.theguardian.com/world/live/2015/sep/04/refugee-migration-crisis-live-eu-biggest-test-since-second-world-war>

同様に、最新の Guardian View で、匿名の論者が、特定しない「紛争」と「抑圧的な、体をなさない国家」の有様を、省略した、おざなりなやり方で説明して、こう言っている――

中東から、アフリカの岬を回って地中海南岸にいたる、紛争に打ちひしがれた、抑圧的な、体をなさない国家が、幅広く存在する。その地域には、彼らと彼らの家族の未来は、ヨーロッパにしかないという、尤もな決論を下している、何千万もの人々が生活している…

彼はリビアが“ほどけた” (unraveled) と言っているが、どのように、なぜ、という議論は避けている。彼が――はっきり述べる危険を冒さないようにして――言っている意味は、シリアの難民は、“同盟軍”の爆弾からでなく、アサドから逃げているということである。

アラブの春の楽観主義は消えた。カダフィ大佐は暴君だった。にもかかわらずリビアは、彼が除かれた後の余波で、暴力的にほどかれた (崩壊した)。バシャル・アル・アサド (政権) に介入するのを躊躇したことが、このシリア大統領に、彼の人民を殺し続ける許可を与えた。

明らかに、この“ガーディアン・ニュースピーク”では、ドローン攻撃、空爆、それに狂ったジハードへの資金援助＝“介入したくないこと”であり、この地ですべての問題を起こしているのは、我々の女々しい平和主義であって、我々の爆弾やドローンや気違いじみたジハードではない、ということになっている。

(ガーディアン・ニュースピークだけではない。実は、目を疑うほどよく似た「我々が何もしなかったためにこれが起った」という考え方が、テレグラフ紙の Boris Johnson 論文でも売り出されている。この意見論文の“偶然の一致”は、予め計画されたアジェンダが存在

することを示唆している。) <http://t.co/TPdMc318AM>

この器用な現実のひっくり返しが、次のステップへうまくつながる——

### ステップ3：解決（策）

「もっと多くのことがなされねばならない」と、ガーディアンの見出しは金切り声をあげている。この「もっと多くのこと」とは現実には何か？ 匿名の論者——こ“解決策”をガーディアンの中心読者に売りつける使命を与えられた人物——は、まっすぐ言わないようにしながら、しかし十分はつきり言っている。

現在の危機を論ずるとき、難民の間の法的区別——差し迫った危険から聖域を求めてきた者たちと、自分と家族のためによりよい未来を求めて移住してきた、より多数のカテゴリーの者たちの区別——を忘れないことが重要だが、同じく重要なのは、経済活動も法も秩序も崩れかかっている所では、この2つのカテゴリーの間に線を引くのは、技術的にも倫理的にもむづかしいということだ。

翻訳すれば——亡命者/難民が逃げ出している、体をなさない国家を、我々が修繕しない限り問題はなくなる、ということ。そしてもちろん——

シリアの窮状は、最も直接的な、道徳的、戦略的問題だから、ここはヨーロッパが最初に解決を試みるべき場所である。

ああ、ではその「解決」のためには、どうせよとあなたは言うのか、アジェンダに関係のない匿名のガーディアンの賢者よ？

EUに向かう難民の数の増加は、何百万というシリア人の中で希望が消えたことを示すが、一方、彼らの祖国が彼らの生きているうちに、再び安全になると考えて、隣接する国々に移住した人々も多い。その希望を取り戻すためには、まず、何らかの国際的介入が必要になるであろう。

「何らかの国際的介入」？ あなたの言うのは、西洋（西側）の軍事介入ということか？ 確かに彼はそういう意味で言っている——

信用できる安全地帯の設定と、飛行禁止ゾーンの実施は、真剣な考慮の対象でなければならない。ロシアは、アサドに最も大きい影響力をもつ国家として、何とかして彼を説

得して、抑えておかなければならない。EU 諸国は、彼らの努力と資力を、休戦の条件作りにもっと多く費やす用意がなければならない。

他所の国で「飛行禁止ゾーンを実施」ということは、基本的にその国に対する宣戦布告である。だから、驚くべき偶然の一致によって、メディアがこれほど盛んに宣伝している、現在の難民危機に対する解決とは、彼らが 2012 年以來、一般大衆に売りつけてきたのと、全く同じシリアとの戦争である。信じられないことではないか！ これは、あなたの家に毎日やってきて、万病の薬として“蛇の油”を売ろうとするセールスマンと、同じくらい説得力のある話である。クルド族を救いたいって？ それならシリアを爆撃せよ！ ISIS を止めたいって？ シリアを爆撃せよ！ 無力な難民を救いたいって？・・・

しかし今度だけは彼らは、我々のかつての懐疑主義を忘れて、それを買うことを望んでいる。なぜなら、いま我々は、「国土・財産を奪われた」(dispossessed) 群衆が、奪った我々を襲うかもしれないと恐れているからだ。

ヨーロッパが、この広い世界での自分の立場を論理的に説明することが、ひとたび内部の問題が片付いたときには、目標になればならない、としばしば論じられてきた。しかしその時はずっと延期されている。にもかかわらず、残りの世界は待とうとしない。その恐ろしい、すべてを奪われた者たちが、ヨーロッパの玄関を激しく叩いている。

まさにこれがメッセージの中心である——

EU は、アメリカのアジェンダの背後に隠れ、シリアへの侵略を支持し、その手伝いさえしなければならぬ。そして多分、我々がアメリカと一線上に並ぶためには、何か別の、まだ特定できない法制を実施しなければならぬ——さもないと、“恐ろしい、すべてを奪われた者たち”に制圧されるだろう。

別の言葉でいえば、“恐怖ポルノ”だが、偽りの同情が注意深く織り交ぜてある。主流メディアであなたが読んだり聞いたりする他のすべては、この考えを、集団的精神の中に植え付けることにかかわっている。彼らが作り出そうとしている考え方は、難民危機が、突然(そして不可解なことに) **あまりにも巨大で、あまりにも手に負えず、あまりにもヨーロッパの安全や、国内経済や、その他もろもろの心配事にとって脅威なので、アサドを爆撃して、ロシアとの代理戦争を始めるのが、より賢明な現実的な代替策ではないか**、ということである。

これこそ——それは決していかなる同情でもない——主流メディアが、ますますありそうもない、ヒステリックな、調べもしない難民物語作りにも、懸命になっている理由である。こ

れこそ、幼い男の子の葬式の写真が、ガーディアン紙のページに、不可解に“浮上する”理由である。この子の家族がシリアでなく、トルコから——NATO 加盟国で、現在、自国のクルド族を残酷に扱っているトルコから——逃れてきたという事実は、全然、関係がないようだ。

<http://www.theguardian.com/world/live/2015/sep/04/refugee-migration-crisis-live-eu-biggest-test-since-second-world-war#block-55e9a877e4b09849138e835d>

<http://www.theguardian.com/world/live/2015/sep/04/refugee-migration-crisis-live-eu-biggest-test-since-second-world-war#block-55e97909e4b0ead230cdf832>

それは、祖国を追われてきた人々に対する、良心の危機などではない——我々がどんなにそう考えても。それは、彼らの覇権に対するもう一つの反対の中心を、滅ぼそうとする“帝国”の長年の計画を、我々に認めるように要求する、最後の一押しである。

## アップデート

「難民危機」のメディア解釈の背後にあるアジェンダについて、多少でも疑念があったとしたら、それはこの文章が発表されてから数時間のうちに、完全になくなった。そのとき以来、BBC はこう報道している——英国内閣は、英軍部隊をシリア地上に送ることを考えている。これに続いて、ガーディアンの Jonathan Freedland が、上のほとんど逐語的に引用した、匿名の社説をエコーする文章を書いた。幼い Aylan Kurdi に対する形式的哀悼と、難民を援助するイギリスの苦しい財政について触れた後、フリードランドはこう言っている——

<http://www.bbc.co.uk/news/uk-34155501#>

<http://www.theguardian.com/commentisfree/2015/sep/04/aylan-kurdi-refugee-crisis>

避難民のための行動とは、彼らが到着したとき歓迎するだけでなく、彼らが祖国を離れざるを得なかった問題への対処をも意味する。今シリアから逃れている人々は、そこが文字通り住めなくなった、誰も住めない場所だと言っている。彼らはこの結論に、4年間の殺人暴力の後で、ゆっくりたどり着いたのだ。彼らにこれを思い直させるためには、地区評議会のレベルとは遠くかけ離れた行動が要求される——ISIS 殺人鬼の行為だけでなく、バシャル・アル・アサドの“たる爆弾”をやめさせる国際的努力である。

幼い Aylan の家族が 3 年間トルコに住んでいたことや、トルコがクルド族の問題では、シリアよりもっとタチの悪い人権問題を抱えていることは、関係がないようだ。また、“たる爆弾”が、我々を前回、戦争に導こうとしてメディアがウソをついた“毒ガス”と同じく、アサドのものでないことも、意に介していないようだ。